

科研バックエンド問題研究会
「高レベル放射性廃棄物(HLW)処理・処分施設の社会的受容性に関する研究」
第4回 TF 研究会 議事録

日時：2017 年 10 月 16 日（月）18:00～20:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス 19 号館 713 会議室

記録：吉田朗＋橋長宏明

出席者(敬称略)：
研究会メンバー

松岡俊二（研究代表）	早稲田大学国際学術院（アジア太平洋研究科）・教授
師岡慎一	早稲田大学理工学術院（先進理工学研究科）・特任教授
勝田正文	早稲田大学理工学術院（環境・エネルギー研究科）・教授
黒川哲志	早稲田大学社会科学総合学術院（社会科学研究科）・教授
松本礼史	日本大学生物資源科学部・教授

研究協力者

勝田 忠広	明治大学法学部・准教授
-------	-------------

事務局

李 洸昊	早稲田大学アジア太平洋研究科・博士後期課程
吉田 朗	早稲田大学社会科学研究科・博士後期課程
CHOI Yunhee	早稲田大学アジア太平洋研究科・博士後期課程
片寄凌太	早稲田大学創造理工学研究科・修士課程
橋長宏明	早稲田大学先進理工学研究科・修士課程

オブザーバー

岩田 優子	早稲田大学アジア太平洋研究科・博士後期課程
YAO ZIWEN	早稲田大学アジア太平洋研究科・修士課程
YAN YAN	早稲田大学アジア太平洋研究科・修士課程

報告 1: 吉田朗「東洋町調査報告について」

- ・ 東洋町の調査結果報告
- ・ 調査からわかった 2 つの事実に関して
- ・ 文献調査から概要調査へ移行する際の拒否権限に関して
- ・ インタビュー調査を終えてわかったこと
- ・ 今回の調査を通じて得られた考察

討論

松岡: 9 月 8 日（金）に東洋町調査を実施した。東洋町は今日に至るまで唯一、地層処分の文献調査に応募した自治体である。北から南まで 10 以上の地方自治体に立候補の話があったが、最終的に応募したのは東洋町のみである。今日に至るまでの様々な文献で、当時の漁業組合長（野根地区）が世界エネルギー開発機構の関係者と話をして田島町長に働きかけたことがわかっているが、具体的な地層処分施設を建設地点の話はなかったが、今回の調査で東洋町の相馬地区という場所が候補地だったらしいことがわかった。現地に赴くと風光明媚でとても綺麗な場所なのだが、人が誰もいない。サーファーもいない。東洋町の町制史をたどると、野根と甲浦が合併して今日の東洋町ができた。町誕生後、役場が野根地区と甲浦地区に、役場が交互に設置されていた。問題になった候補予定地は相馬といわれる地域は、現在の役場のある生見地区の近くである。なお、東洋町は、室戸市側からみて、野根・生見・甲浦という 3 地区で構成されている。甲浦地区には、大型フェリーを接岸した港がある（甲浦港）。今回のインタビュー調査で判明したことが、NUMO は大型の船をつける余裕のある港にも着目しており、それが甲浦港である。立地に関するある程度具体的な目論見が NUMO にはあったことが今回の調査で分かった。

松本: 応募書の写しについてであるが、朝日新聞の『プロメテウスの罫』では文書番号が入っていないから「正式な文書ではない」と町の誰かが言ったと記載されている。その後に出した 2 回目の文書には正式な文書番号が入った形になっていると思われる。この写しは 1 回目のものか、2 回目のものか。

吉田: これは 1 回目のものである。2 回目の応募書を探すことはできなかった。ただし、1 回目の段階で具体的な地域が記されていたのは明白で、さらに、東洋町が場所をある程度限定していた点は興味深い点である。

松岡: 2 回目の文書で区域が指定されているかどうかは分かりかねる。ただ、おそらく想定されるところは当然あったのではないかということは現地に行ってみて初めて分かったことだ。

松本: 最初に怪しげなコンサルが入ってきている地点で地域を特定していたのではないだろうか。

松岡: 地質や町のことがわかるコンサルなどが関与していたのだと考えられる。そこそこ目論見がある話だったということが一つの事実である。また、元町議の原田さんは、文献調査は町長さえ手を挙げていればどんどん進んでしまうという点ももう一つの注目すべき点だ。文献調査の後の概要調査、精密調査は地元の知事や首長の了承を得て進むという点では、原田さんの話ではその反対理由がしっかりしていないと経産大臣の方が無視をするかもしれないということを言っていた。しかし、当時の国会では必ずしもそのあたりを裏付ける答弁は確認できなかった。2000 年当時の深谷隆司という経済産業大臣が地元の意向を無視しては先に進めないと答弁しており、2007 年に再度、委員会質問で深谷答弁を踏襲するのに関し確認があり、甘利経産大臣も同じ答弁をしていた。しかし、文献調査に関しては当該の市町村の首長が手を挙げればそれで合法だということになる。あるいは県知事等が反対しても、文献調査を実行できるというのが国の立場であり、法解釈上もそういう解釈が成立しているようだ。

師岡: 手を挙げた人は純粋に金が欲しかったのか。本気で地層処分をやる気はなかったのではないかと感じる。

松岡: その通りである。もめたら断ればいいという感覚だった。

師岡: 町長の言い分もわからなくもない。

松岡: これだけ住民の反対にあったら難しい。

師岡: 本気で地層処分をやる気はなかったのだろう。

松岡: 今回のインタビューを通じて感じたことだが、当事者間の遺恨は現在でも残っているようだ。

報告 2: 李洸「福島 1F 視察報告について」

- ・ 福島 1F 視察の報告
- ・ 福島 1F の現状の紹介
- ・ 今回の視察で見えてきた課題
- ・ 福島 1F に関する社会的受容性の考察

討論

勝田(忠): 凍土壁の議論の過程が非公開というのは本当の話なのか。

李: その議論に関しては、非公開とのことである。

勝田(忠): その後の原子力規制委員会ではなぜ凍土壁が採用されたのかに関する議論があったのだろうか。その議論があればそれで判断するしかない。

松岡: なぜ凍土壁なのか、その経緯などはあったのか。

勝田(正): わからない。

黒川: 1F 視察に行った際の説明では、廃棄物が出ないから有効であるとの話をしていたと思う。

師岡: こういう案を調べるのであればいろいろな案を出し、選択するはずなのだが、それは公開されていない。なぜ公開されないのだろうか。

松岡: そういう比較のようなことを、実際にはやっていないのかもしれない。

師岡: 通常、何百億のお金が動くプロジェクトでは絶対に比較をやっているはずだ。

勝田(正): 聞いた話では、10 階建てのビルを 30 棟から 40 棟冷やし、マイナス 35℃にする。それを流すことによって凍らせている。海側の凍土遮水壁はうまくいったんじゃないかという話はある。

李: 本当に凍結されているのかどうか確認ができない。

師岡: とんでもないお金がかかるだろう。

松岡: 当初予測していた維持管理費よりも安く済んでいるらしい。そのため、10 何億が何億に下がったのではないかと感じる。

師岡: もし、凍土遮水壁の装置が壊れたらに何百億も費用がかかるのではないだろうか。

松岡: とりあえずデブリの取り出しの前に使用済みの燃料の取り出しの問題を解決しなければならない。3号機の使用済み燃料の取り出しを行ったあと、1号機、2号機の取り出しに移るのではないかな。

師岡: デブリの取り出しを誰がやるのが非常に問題。新入社員がこの作業を行うとは思えない。

松岡: ここで使う技術はかなり特殊であろう。大変な技術だけど普通の廃炉では使わない。

師岡: 若い技術者が気力を持ってこういう作業をやってくれるかが非常に問題である。

李: それと同時に、作業員の確保も非常に問題である。

松岡: 金さえあれば作業員の確保はできるだろう。しかし、熟練した技術が必要になる作業に対する作業員の確保は今後問題になってくるかもしれない。

報告 3: CHOI Yunhee「フィンランド・フランス調査計画に関して」

- ・フィンランド・フランス調査計画の概要
- ・フィンランドとフランスの処分場の採択方法
- ・フィンランドの既存の文献と研究課題
- ・フランスの既存の文献と研究課題
- ・視察のスケジュール

討論:

松岡: 現在2年目なので今年は海外調査に2018年の2月5日からフィンランドとフランスに現地調査に行く予定である。どのようなリサーチクエストにしていくのかをこれから研究会メンバーの意見を聞きながら詰めていきたい。とりあえずはポシヴァ社を主体に地層処分場の建設に入っているオルキルオトやアンドラの地層研究所の視察、または関係者へのインタビュー調査を行っていただければと考えている。

報告 4: 松岡 俊二「今後の研究計画について」

- ・次回の研究会に関して
- ・今後の研究計画に関して
- ・勝田（正）先生、師岡先生の研究案に関して
- ・黒川先生の研究案に関して
- ・松本先生の研究案に関して

討論:

勝田(正): 地層処分が妥当なのかどうか、または長期的な地層のデータを本当に使用できるのかどうかをこのプロジェクトにおいて検証したいと考えている。

松岡: 勝田先生と師岡先生で第三者的にリスク評価をしていただければと思っている。

師岡: 学会というのは現状のレビューがメインでいいのかな。

松岡: レビューだけではなく、そこから政策的な方向に発展させて自分たちなりの考察をまぜ、どのように信頼を高めていくことができるかどうかというところを考えればいい。

師岡: 今、政府や NUMO はいろいろなことをやっているが、実際には社会的に信頼されていない現状なので、どのようにすれば世間から信頼されるようになるのかというところを考えるのがいいのではないかな。そうしないと中々面白い発表にならない気がする。

松岡: 去年、栃山さんのところ（技術 WG）が安全性の評価に関するレポートを出しているが、あくまで内部の関係者のものなので、外部から安全性評価をおこなうことができればと思う。そのため、勝田先生、片寄君、師岡先生、橋長君で来年の学会に向けて安全性評価・リスク評価のところで詰めることができればと考えている。4人で共同研究ができそうなので、ぜひ詰めて頂きたい。黒川先生の研究計画に関して説明を頂きたい。

黒川: 北海道や幌延は制度的には核燃料の受入が拒否されており、制度的受容性がないと思われるが、条例を根拠に拒否が可能かは別問題である。核燃料の受け入れ先は全国どこにもないということになると原子力発電所に貯蔵されている核燃料の行き場もなくなり、全国的に危険な状況になる。そのような状況下で拒否条例がどのように位置づけられるかという点を社会的受容性の観点から考察をおこないたいと考えている。

松岡: マクロ的な部分と地域的な部分も関わってきそうだ。松本先生はどのように進める予定なのか。研究計画があれば提示頂きたい。

松本: 市場的受容性と地域的受容性に関しての課題だが、地層処分施設の事業期間には市場的受容性が満たされたとしてもその後、何万年の間は成立しうるのかどうかに関して議論したい。その場合、市場的受容性を正面から考えるのは少し難しいかもしれない。市場的受容性を取り上げるのであればあくまで事業期間に限定した調査になるのかと感じている。地域的受容性に関しては地域の将来像をどのように受け入れるのか、地域の意思決定の在り方などをまとめることができればと思う。

松岡: フィンランドのオルキルオトの選定方法や社会的受容性の獲得過程など海外の事例なども参考にできるのではないかと。そのあたりも含めて市場的受容性と地域的受容性を議論できるのであれば検討して欲しい。次回の研究会でさらに詳しく研究テーマを詰めることができればいいのではないかと感じている。勝田忠広先生にも仮にということで総論の方に参加していただいているが、必ずしもそこにとらわれずに原子力政策全般の中でリスクコミュニケーションや社会的受容性の中でやりたいものがあればそれに対して考えていただければと思っているが、何か現時点での案があれば、この場でお示し頂きたい。

勝田(忠): 今はまだ思いつかないが、ありそうなので少し考えてみる。

松岡: 院生の方もそれぞれのテーマを具体化して、次回 12 月 11 日の第 5 回 TF 研究会でさらに詳しく議論していければと思っている。

以上